

学習評価について (小学校算数科)

観点別学習状況の評価の観点の整理(p. 6~)

資質・能力の三つの柱に基づいた目標や内容の再整理を踏まえて、観点別学習状況の評価の観点については、小・中・高等学校の各教科等を通じて、「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の3観点到に整理されました。

<現行>

- 関心・意欲・態度
- 思考・判断・表現
- 技能
- 知識・理解

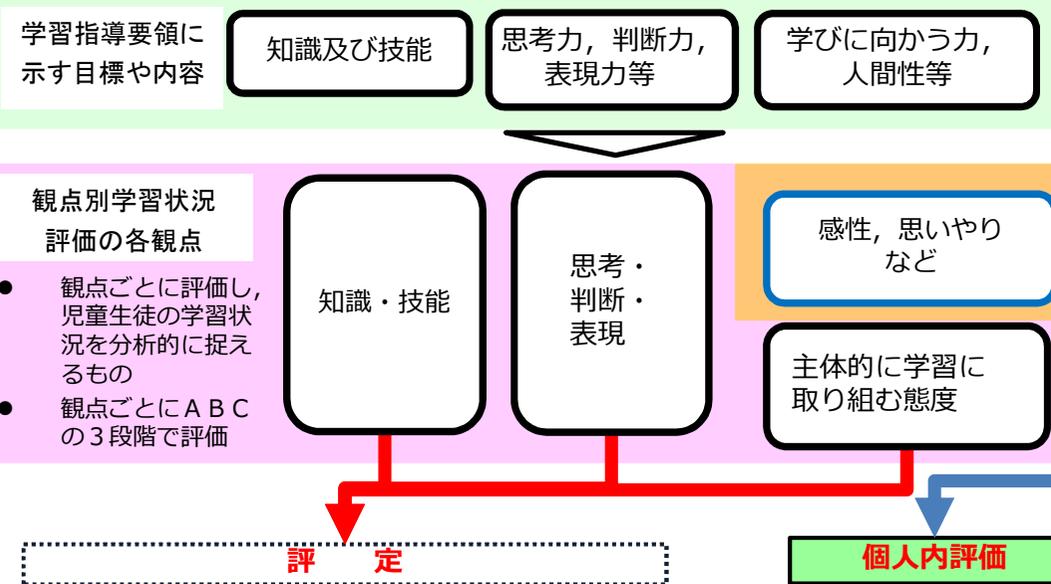
<新>

- 知識・技能
- 思考・判断・表現
- 主体的に学習に取り組む態度

現行の4観点で評価していた指導事項が、全て3観点到に再整理されました

学習評価の基本構造(p. 8~)

各教科における評価は、学習指導要領に示す各教科の目標や内容に照らして学習状況の評価するものです。(目標準拠評価)したがって、目標準拠評価は、集団内での相対的な位置付けを評価するいわゆる相対評価とは異なります。



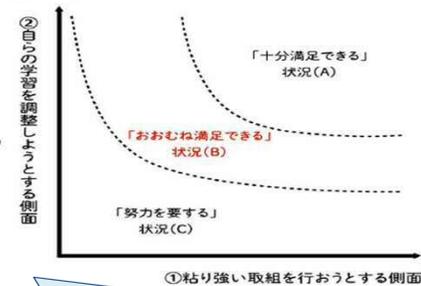
- 観点別学習状況の評価の結果を総括します。
- 5段階で評価 (小学校は3段階。小学校低学年は行わない)

- 観点別学習状況の評価や評価には示しきれない児童生徒一人一人のよい点や可能性、進歩の状況について評価するものです。

「主体的に学習に取り組む態度」の評価(p.10~)

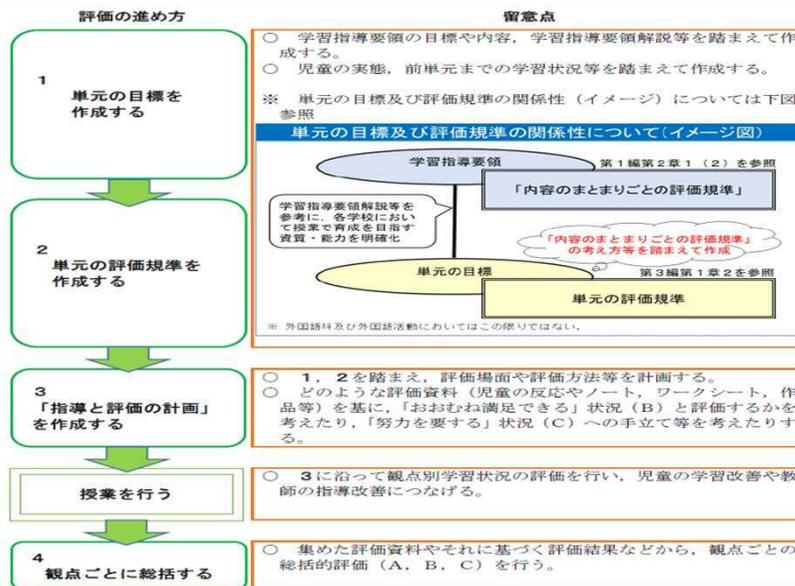
「主体的に学習に取り組む態度」の評価のイメージ

- 「主体的に学習に取り組む態度」の評価については、①知識及び技能を獲得したり、思考力、判断力、表現力等を身に付けたりすることに向けた粘り強い取組を行うこととする側面と、②①の粘り強い取組を行う中で、自らの学習を調整しようとする側面、という二つの側面から評価することが求められる。
- これら①②の姿は実際の教科等の学びの中では別々ではなく相互に関わり合いながら立ち現れるものと考えられる。例えば、自らの学習を全く調整しよとせず粘り強く取り組み続ける姿や、粘り強さが全くない中で自らの学習を調整する姿は一般的ではない。



単に継続的な行動や積極的な発言など、性格や行動面の傾向を評価することではなく、自らの学習状況を把握し、学習の進め方について試行錯誤するなど学習の調整をしながら、学ぼうとしているかどうかという意思的な側面を評価することが重要です。そこで、①粘り強い取組を行うこととする側面②自らの学習を調整しようとする側面という、2つの側面から評価します。

学習評価の進め方について(p. 37~)



児童の実態や教材等をもとにした年間指導計画により、指導と評価の計画をたてます。算数科では、「内容のまとめり」で示された内容の数の違いから、それに関わる授業時数も異なります。各学校において単元を作成する際には、「内容のまとめり」を①いくつかの単元に分割する②そのまま単元にする③いくつかをまとめて単元とするという3つの場合があることに留意しましょう。

単元の評価規準の作成の手順 (p. 39 ~)

1「内容のまとめりごとの評価規準」作成

(例) 第3学年「A 数と計算」(4)「除法」

「内容のまとめりごとの評価規準 (例)」

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
<ul style="list-style-type: none"> 除法の意味について理解し、それが用いられる場合について知っている。また、余りについて知っている。 除法が用いられる場面を式に表したり、式を読み取ったりすることができる。 除法と乗法や減法との関係について理解している。 除数と商が共に1位数である除法の計算が確実にできる。 簡単な場合について、除数が1位数で商が2位数の除法の計算の仕方を知っている。 	<ul style="list-style-type: none"> 数量の関係に着目し、計算の意味や計算の仕方を考えたり、計算に関して成り立つ性質を見いだしたりしているとともに、その性質を活用して、計算を工夫したり計算の確かめをしたりしている。 数量の関係に着目し、計算を日常生活に生かしている。 	<ul style="list-style-type: none"> 除法に進んで関わり、数学的に表現・処理したことを振り返り、数理的な処理のよさに気付き生活や学習に活用しようとしている。

評価規準の文言を、**具体的な書き方で表現を揃えます。**

2「具体的な内容のまとめりごとの評価規準」作成

「具体的な内容のまとめりごとの評価規準 (例)」

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
<ul style="list-style-type: none"> 包含除や等分除など、除法の意味について理解し、それが用いられる場合について知っている。 除法が用いられる場面を式に表したり、式を読み取ったりすることができる。 除法と乗法や減法との関係について理解している。 除数と商が共に1位数である 	<ul style="list-style-type: none"> 除法が用いられる場面の数量の関係を、具体物や図式を用いて考えている。 除法は乗法の逆算と捉え、除法の計算の仕方を考えている。 余りのある除法の余りについて、日常生活の場面に応じて考えている。 「日常生活の問題」(単なる文章題ではない。情報過多の問 	<ul style="list-style-type: none"> 除法が用いられる場面の数量の関係を、具体物や図などを用いて考えようとしている。 除法が用いられる場面を身の回りから見つけ、除法を用いようとしている。(「わり算探し」など)

単元に合わせ、**内容のまとめりの評価規準をそのまま用いたり、分割したり、組み合わせたり**します。

3「単元の評価規準」作成

(1時間ごとに何を評価するか、具体的に)

単元「余りのあるわり算」の評価規準 (例)

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
<ul style="list-style-type: none"> 包含除や等分除など、除法の意味について理解し、それが用いられる場合について知っている。 除数と商が共に1位数である除法の計算が確実にできる。 割り切れない場合に余りを出 	<ul style="list-style-type: none"> 除法が用いられる場面の数量の関係を、具体物や図などを用いて考えている。 余りのある除法の余りについて、日常生活の場面に応じて考えている。 	<ul style="list-style-type: none"> 除法が用いられる場面の数量の関係を、具体物や図などを用いて考えようとしている。 除法が用いられる場面を身の回りから見つけ、除法を用いようとしている。(「わり算探し」など)

指導と評価の計画 例 (p.50~)

<参考>「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料
国立教育政策研究所 教育課程研究センター(令和2年3月)

算数科 事例1
キーワード 指導と評価の計画から評価の総括まで

単元名 余りのあるわり算
内容のまとめり 第3学年「A 数と計算」(4)「除法」

単元の目標や単元の評価規準は、「**児童主語**」の表現で書かれています。

1 単元の目標

- 割り切れない場合の除法の意味や余りについて理解し、それが用いられる場合について知り、その計算が確実にできる。
- 割り切れない場合の除法の計算の意味や計算の仕方を考えたり、割り切れない場合の除法を日常生活に生かしたりすることができる。
- 割り切れない場合の除法に進んで関わり、数学的に表現・処理したことを振り返り、数理的な処理のよさに気付き生活や学習に活用しようとしている。

目標(3)は「**学びに向かう力、人間性等**」(学年目標)に添って設定します。

2 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
①包含除や等分除など、除法の意味について理解し、それが用いられる場合について知っている。	①除法が用いられる場面の数量の関係を、具体物や図などを用いて考えている。	①除法が用いられる場面の数量の関係を、具体物や図などを用いて表現しようとしている。
②割り切れない場合に余りを出すことや、余りは除数より小さいことなどを知っている。	②除法が用いられる場面を身の回りから見つけ、除法を用いようとしている。(「わり算探し」など)	②除法が用いられる場面を身の回りから見つけ、除法を用いようとしている。(「わり算探し」など)

各観点の評価規準の丸数字は、右上の「指導と評価の計画」の丸数字と対応しています。

これらの評価規準を基にして、「指導と評価の計画」では、評価の機会を次の2つに区別しています。

「指導に生かす評価」:主に「努力を要する児童」を確認し、その後指導に生かすための評価

「総括の資料のために記録に残す評価」:学級全員の児童の学習状況を、総括の資料にするために記録に残す評価

ねらいに応じて評価項目や記録に残す評価の機会を精選し、観点に応じた適切な評価場面と評価方法を選択しながら、「指導と評価の計画」を作成します。

3 指導と評価の計画 (10時間)

時間	ねらい・学習活動	評価規準 (評価方法)		
		知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
1	・印は「指導に生かすための評価」を表しています。		○思① (行動観察、ノート分析)	○態① (行動観察、ノート分析)
2	・考える。			
3	余りがある場合の除法の式の表し方や、余・知① (ノート)			
4	等分除の場面についても余りがある場合の除法が適用できるかを考える。		○思① (行動観察、ノート分析)	
5				
6	・「思考・判断・表現」は、授業中の問題発見や解決の過程を行う時間に設定しています。		○思② (行動観察、ノート分析)	○態① (ノート分析)
7	余りをどのように解釈すればよいかを考える。			
8	・「知識・技能」は、繰り返し使う中で定着し、深まり、習熟することから○印を単元末に設定しています。			
9	学習内容の定着を確認する。(評価テスト)	○知①②③ (ペーパーテスト)	○思② (ペーパーテスト)	○態② (ノート分析)
10	学習内容を適用して除法の問題を考えた			○態② (ノート分析)

「主体的に学習に取り組む態度」は、**数学的な見方・考え方が豊かになるとともに単元を通して高まることを考え、○印を単元の終わりにも設定しています。**

【表1】各時間の評価と単元末の評価 (D児とE児)

時	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	児童の様子に関する記事事項	単元の評価の総括
D児											児童の様子に関する記事事項	B
知												
思											方眼紙と図表を使って進んでおり、指導が必要だった。(第3・4時)が、改善された。(第6時)	B
態											図表を使って進んでいた。(第1時)日常生活に結び付けることは難しい。(第10時)	B
E児											日常生活に結び付けることは難しい。(第10時)	A
知									A		余りのある除法の計算が確実にできる。(第9時)	A
思											余りの処理について自力解決の段階では回答できなかった。	A

単元末の評価の例です。総括は様々な方法があり、各学校において工夫することが求められます。

*印は、指導に生かすための評価の時間を示しています。

E児の「思」の評価は、第7時(*)では自力解決できませんでしたが、その後の学びで解決方法に気付き、第9時には確実に解決できた高まりを考慮し、「A」と総括しています。